



# ミンガラバーMJET News Letter

13-3-504, Minami Motomachi, Shinjuku-ku, Tokyo Japan 160-0012  
Tel: 03-3353-6377, Fax: 03-3353-6377, E-mail: info@mjet-tokyo.com



## 植林ツアーに 21 名が参加

今年の植林ツアーは、8月23日から31日まで21名が参加して行われました。参加者は、大学生が12名(内学生会員1名)、小学生1名、MJET正会員4名、一般社会人4名でした。

一行は、全員成田空港から全日空の直行便で出発し、その日の夕方4時頃にヤンゴン国際空港に着きました。明るい内にヤンゴンに着いたので、その日の夕食後にシュエダゴンパゴダにお参りすることができました。

24日は、Dhamma Vihara 僧院において、ミャンマー-日本青年協会の会員と僧院の小学生と一緒に交流会を開催しました。ミャンマーの学生からは歌と共に様々な踊りが披露され、美しい衣装が映えて私たちの目を楽しませてくれました。日本側も暑さに負けず、浴衣姿で、歌、踊り、手品等を披露しました。演目が終了してからは、日本語教室の学生との懇談を行い、友情を育みました。



## 雨にもめげず熱心に植林

25日から28日まではバガンにおいて、村人とともに植林と交流会を楽しみました。コンタンチ村は初めての植林であるため、最初は村人もやや緊張していましたが、2日目には、表情もゆるみ、パートナーの手を取ってリードする村人も現れました。

午後のサッカー試合の後では、村人がバスでホテルに帰る参加者を取り囲み、なかなか解放してくれない、という場面もありました。



28日の農家訪問では、訪れた農家の人たちが参加者にお菓子や飲み物などのおもてなしで歓迎してくれました。他方、インダイン村では、「ゴミ・ゼロ研究」グループが豪雨の最中に、集会所で村人と質疑応答を行いました。豪雨のため、みるみる内に村の道路のあちこちが川のようになるのを体験しました。



詳しくは MJET ホームページの「2014 年植林ツアー体験記」をご参照ください。 <http://www.mjet-tokyo.com>



## 「第二回ミャンマー祭り」に出展参加

10月18、19日に東京・芝の増上寺にて、「第二回ミャンマー祭り」が開催され、MJETは昨年に引き続き出展参加しました。今年は、日本とミャンマーの友好60周年にあたり日程が2日間となり、開催場所も昨年より一回り大きくなりました。一般来場者数は、昨年38,000人といわれましたが、今年は7~80,000人に増えたと思われます。



安倍昭恵首相夫人は、今年もMJETのブースを訪問され、藤村会長が植林事業の概要を説明したところ、後でゆっくり読むから、とパフレット一式を持ち帰られました。



「ミャンマー祭り」が2日間開催されることになり、今年は「植林募金」の募集に力をいれることにしました。パンフレットを改訂し、「記念の森」のフライヤーも改訂版を作成し参加者に配布しました。ブースを訪問された人は約100名に達しました。ブースを訪れた人の中には、もうすぐ結婚する予定のカップルもおられ、「2人の森」をお勧めしました。「植林募金」に応募したい人と「植林ツアー」に興味がある人もおられました。このようなPRが大変重要だということを再認識しました。

## Aung Din さんご一家の訪日

MJETのミャンマー側パートナーであるAung Dinさんが奥様のMay Khinさんと娘さんの美智子さんとともに11月9日に来日されました。今回の来日は同志社大学の岡本先生のお招きによるものです。東京には9日から14日まで滞在され、東京都内(明治神宮、浅草、新宿、銀座等)観光の他、箱根、鎌倉を訪問されました。同時に法政大学にて以下のとおり、2回の講演をされました。

- ①法政大学法学部 弓削明子教授のクラス  
『ミャンマーの現状とポテンシャル』
- ②法政大学 吉田秀美準教授のクラス  
『ミャンマー現代史の中での私の人生  
: 民主化後の変化と将来の展望』





# ミンガラバーMJET News Letter

13-3-504, Minami Motomachi, Shinjuku-ku, Tokyo Japan 160-0012  
Tel: 03-3353-6377, Fax: 03-3353-6377, E-mail: info@mjet-tokyo.com



## 植林ツアー体験記

### たくさんの素晴らしい出会いに感激

立命館大学 大枝友美

今回のミャンマー植林ツアーは私にとって人生初の海外渡航で、学んだ事や考えさせられた事がたくさんありました。ただミャンマーという国を訪問して見聞しただけでなく、日本を客観的に見ることも出来ました。最初に滞在した首都ヤンゴンでは、車の交通量が多く、海外企業(特に日本企業)の進出が見られ、スマートフォンがかなり普及していることに驚きました。途上国で貧しいというのは勝手な想像だったと気づきました。治安も想像していたよりはるかに良く、その背景には仏教への篤い信仰があることを知りました。ヤンゴンにあるシュエダゴン・パゴダ(寺院)を訪れた際には、日常的に多くの人々が参拝していることがわかりました。このパゴダには本物の金や宝石などが多く使われているのに盗難が一切ないことが、信仰の篤さと治安の良さがよく示しています。ミャンマーの90%の人が仏教徒だそうで、ほとんどの国民が同じ倫理観を持ち、その考えを軸に国が成り立っているところがミャンマーの魅力の一つだと思いました。



3日目からは農村部であるバガンへ移動しました。やはり都市部のヤンゴンとは生活水準の差がかなりありました。私たちが訪問したコンタンチ村では生活は決して豊かでも、村人たちは家族のように助け合って生活しているようでした。私は知らない時代ですが、古き良き日本とはこんな風だったのかなと思いました。そういった意味では今私が知っている日本は物質的には豊かですが、寂しい国だと思ってしまいました。

一方で現在ミャンマーでは未だに高い新生児死亡率、不安定な電力供給、水質問題など、生活に関わる様々な面で支援が必要とされています。しかし外部からの行き過ぎた開発で急激に経済成長することによって、ミャンマーで大切にされてきたものが失われてしまいそうに思いました。最近では伝統であるロンジーではなく洋服を着て、仏教の教えを守らずに喫煙や飲酒をする若者が増えてきていると聞きました。また現在学校に行くことのできない子供たちに無償で教育を行っている僧院もこれから先どうなっていくのか、都市部と農村部や人々の間の貧富の格差がどんどん大きくなっていくのではないかと不安になりました。今の私には分からないことが多く、これから大学で開発経済学について学んでいく中で今回疑問に思ったことの答えを自分なりに見つけていこうと思います。

植林ツアーでは素晴らしい出会いがたくさんありました。本当に人に恵まれた旅でした。参加者の方たちやミャンマーで出会った人々はみんな優しくしてくださり、とても暖かい気持ちになりました。3日間に亘ったコンタンジ村での植林活動や交流会で、日を重ねるごとに村の人と仲が深まりました。言葉は通じなくても打ち解けたいという気持ちが伝わったのが嬉しかったです。それでも、もっと話せたらなと何度も思いました。

ミャンマーで経験したこと全てが私にとって印象深く体験記もうまくまとめられておりませんが、一番思うことは、実際に自分自身が経験しなければ何もわからないということです。現地の人々と深く関わり、地域に貢献することができるこの植林ツアーは、通常の観光では決してできない経験ばかりでした。また参加者の健康や衛生面を十分に気遣っていただいたプランだったので安心して過ごすことが出来ました。できればまた来年も参加して、今度はミャンマーの事やミャンマー語も勉強した上で行きたいです。



## ミャンマーエコツーリズム紀行

### 「メイミョウへの旅」

読者の皆さんは「メイミョウ」という都市の名前をご存じでしょうか？「メイミョウ」はマンダレーの北東 70 km にあります。イギリスの植民地であった頃から、イギリス風の読み方で多くの都市や道路が呼ばれていましたが、1989 年に設立された軍事政権は従来のイギリス風の固有名詞をことごとくミャンマー風に変更して呼ぶようにしました。

この結果、「メイミョウ」は、現在「ピンウールイン」と呼ばれています。「メイミョウ」が何故有名かという、二つの理由があります。

第一にメイミョウは日本の軽井沢のような気候温暖で涼しい避暑地として有名なところです。標高約 1200 メートルといえば、ケニアのナイロビのようなところでもあります。なだらかな高原状の町は、年中心地よい過ごし易い町です。イギリスのビルマ総督は、4 月～5 月の暑気の間、メイミョウに居を移し、執務を行っていました。今でもその住宅と事務室が残っており、ホテルの一部として使われています。住宅の中には室内プールがあり、ゆったりとくつろげるバーや広い居間があります。実に贅沢な作りで、一夜の旅にも快適そのものです。宿泊するには事前の予約が必要です。



左が総督の住居で右側が執務棟

第二にメイミョウは、戦前、戦中において、連合軍によるインドのインパールから中国の雲南省昆明にいたる重要な軍事物資輸送道路の中継地でありました。日本軍が中国で蒋介石の国民党と戦っていた時、連合軍はビルマ経由で軍事物資を雲南省の国民党に届けて支援をしていました。このため、日本軍はこのルートを「援蔣ルート」と呼び、このルートを遮断するために、1941 年にビルマに進軍しました。

インパールからメイミョウに至る道路は、まさに日光のいろは坂のようで、ジグザグに上って行きます。当時のトラックのエンジンは馬力が弱かったので、この急な坂道をあえぎながら上って行ったのではないかと思います。

また、メイミョウには日本軍の第十五軍の総司令部が置かれていて、インパール作戦で有名な牟田口中将が指揮を執っていました。ビルマ国軍の将校を訓練するための国軍士官学校もここに置かれ、現在もそのまま使われています。援蔣ルートの坂道は、現在では上りと下りが別々に別れ、どちらも 2 車線の立派な舗装道路になっています。



メイミョウの町に入る 15 分くらい前の道端にイチゴ農園があり、おいしいイチゴジュースをだしてくれます。イチゴは甘いけれどとても小さいので、いつか品種改良をしたらよいのに、と思っていたところ、最近神戸の会社が農作物の品種改良をすることになり、「とちおとめ」を栽培する計画だそうです。

(藤村記)